

第5号は「コンパクトシティ講座」を紹介。

「ずくワク」とは、岡谷市が発行するまちづくりに焦点を当てた情報紙です。「まちづくり」とは、一体誰がするのでしょうか？

実は、気持ちがあれば、誰にでもできることなのです。タイトルの「ずくワク」には、ずくを出してワクワクしながらまちづくりに参加しようという意味が込められています。

第5号は、2月にカノラホールで開催した平成28年度第2回まちづくり連続講座「コンパクトシティ講座」にスポットを当てます。

当講座の基調講演は、4月1日～30日までシルキーチャンネルで放送されます。

第5号

岡谷まちづくり通信 ずくワク

発行 岡谷市建設水道部都市計画課
〒394-8510 岡谷市幸町8-1 Tel 0266-23-4811 toshikei@city.okaya.lg.jp



首都大学東京の饗庭伸准教授

2月12日、平成28年度まちづくり連続講座の第2回目として「コンパクトシティ講座」がカノラホールで開催され、約90名が参加しました。人口減少が進む中、都市計画やまちづくりの方とともに考えました。

首都大学東京の都市環境学部で准教授を務める饗庭（あいば）伸さんが「コンパクトシティとは何か？」（人口減少時代のまちづくり）と題して講演しました。

コンパクトシティは、人口増加にともなつて拡大してきた都市が、人口減少期に入り、併行して高齢化も進むことから、空洞化や活力の低下が懸念されるため、都市機能や居住を一定の範囲に集約し、

が発生するため、小さい穴が不規則に開くよう都市はスボンジ化する」とこれまでの研究をふまえ、コンパクトシティ形成の難しさを解説しました。

都内の空き家を市民の力で地域交流の拠点として再生し活性化した事例を示し、スポーツによる活動が求められると述べました。

岡谷には都会よりもたくさんの暖かい人間関係や良い建築物があるはず。色々な取り組みができる」として、住民が多彩な発想でまちづくりに取り組むと「メリハリが利いた縮小都市が見えてくる」と方向性を示しました。

平成28年度 第2回まちづくり連続講座「コンパクトシティ講座」開催

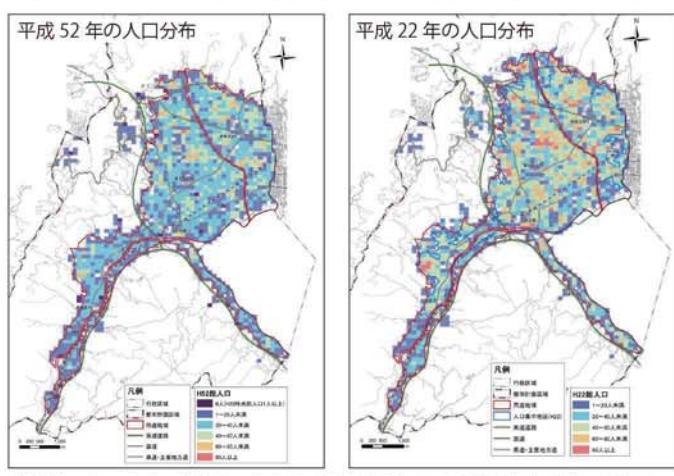
岡谷のまちの『健康診断』を報告

立地適正化計画の策定にあたり、岡谷市が抱える課題や解決すべき課題を抽出するため、各種の基礎的データを収集して都市の現状を把握し、さらに人口の将来見通しに関する分析などを进行了。例えるなら岡谷のまちの『健康診断』です。

岡谷市の人口は、昭和55年の約6万2千人をピークに減少が続いている、平成27年には約5万人となりました。このままでは、平成52年には約3万8千人にになると予想されています。

人口の分布は、平成22年の国勢調査によると、市街地の基準として言っている1ヘクタール当たり40人を上回る地区が市役所周辺や長地地区などに分布していますが、平成52年になると基準に満たない部分が増え、人が住まない地区も現れる予測されました。

この人口分布をもとに鉄道駅やバス停から歩いて行ける範囲に住んでいる人口の割合、野県内でも岡谷市と人口規模が類似の諏訪市、塩尻市、千曲市の指標と比べた結果、岡谷市は生活の利便性や健康福祉の分野では高評価となり、現状では他の



市街地の人口密度の基準は40人/ha以上とされる。凡例は青色系が40人/ha未満。現状のままの推移すると、平成52年には青色系の部分が多くなり、低密度な市街地となることが予測される。

これらの各指標を長野県内でも岡谷市と人口規模が類似の諏訪市、塩尻市、千曲市の指標と比べた結果、岡谷市は生活の利便性や健康福祉の分野では高評価となり、現状では他の

3市と比べると暮らしやすいという結果となりました。皆さんの実感はいかがでしょうか。一方で、災害の危険度の高い範囲に住む人の割合が高い、空き家の割合が多いといった安全安心に関する指標では、低評価となり、岡谷市の課題が浮き彫りになります。

政面の指標では、低評価が浮き彫りになります。今後はこれらをふまえ目指すべき都市の骨格構造等を検討していく